



広場にいるココア（手前、黒）とハクは、子どもたちの人気ものだ＝幸手市の「学びっ人村」のホームページより

埼玉県の東武日光線幸手駅近くの商店街は、旧日光街道宿場町の面影が残る。夏休み明けに、約130人の小学生が制作した造形作品などを30カ所に展示する「アートさんぽ展」がある。

「しょっかくを楽しもう！」。小学5年のみずほちゃんは「手のひらで触って、ムニムニと握ってもらおう」スライムとラメや粘土、綿などが入った五つのビニール袋をぶら下げた作品を薬局に並べる。

「もみもみするとなね、日ごろの息苦しさですつと抜ける時があるの。自分の世界が見えたりすることもあるんだな」

の小林晃一さん（66）だ。「ぼくも子どもの頃、石ころとか葉っぱとか、いじっているのが大好きだった」。小林さんとみずほちゃんが共有する「手のひら感覚」に近づきたい。

よんなな エコノミー

「もうひとつの学校」と
子どもたちの可能性

駅近くの、2匹のヤギが住む広場と天井の高いアトリエがある「学びっ人村」に、妹のはるかちゃん（小2）と通う。

村長は、公立中学校で10年近い美術教師の経験がある彫刻家

今回の「さんぽ展」には、学びっ人村で学ぶ約50人に加え、近くの市立長倉小の6年生80人余りも参加する。

佐藤美月さんは、勢いよく吹き上げる噴水の形を碧と銀の二色の針金で表現、寺の境内に置く予定だ。「深い青色の水の動きも見てほしい」と美月さん。

宇宙が好きで、覚えた元素記号は50個を超えた。化合物やら元素やら、何で？なんで？と母親を質問攻めにする毎日だとか。

そんな子どもたちが、絵や粘土、木工造形を街の金物店や美容院、パン屋さんなどに並べる。

企画への参加を決めた井上弘江・同小校長は「子どもたちが学校の外へ出て、地域のひとと一緒に、自分の作品を考えて。可能性を広げてほしい」。

学びっ人村のなかで、みずほちゃんら10人は、この4月からスタートした「オルタナティブスクール（もうひとつの学校）」で学んでいる。

国語・算数・社会・理科・英

会話など従来の教科も一通りこなすが、広場横の農場での米や野菜作り、木製ブランコや滑り台作りなど独自性も重視する。

従来の公立学校には肌が合わなかったみずほちゃんは「前の学校ダイキライ」と言う半面、学びっ人村に通い始めたたん、「こんな天国みたいな場所に行かない理由がわからない」。

不登校の小中学生は2022年度に過去最多の約29万9千人（文部科学省調べ）を超えた。

こうした子どもたちが学ぶ場所を確保するために、フリースクールなども増え、公立学校と連携する模索も進んでいる。

小林さんはさんぽ展をきっかけに、長倉小との合同授業を、秋の稲刈りや正月の餅作りなどに発展させたいと考える。一方で、「在宅医療や看取り」を専門とする医師など専門家の話を親子で聞いて、社会の現実を知り体験授業も始めている。

さんぽ展は9月5〜8日だ。

（ジャーナリスト・菅沼栄一郎）